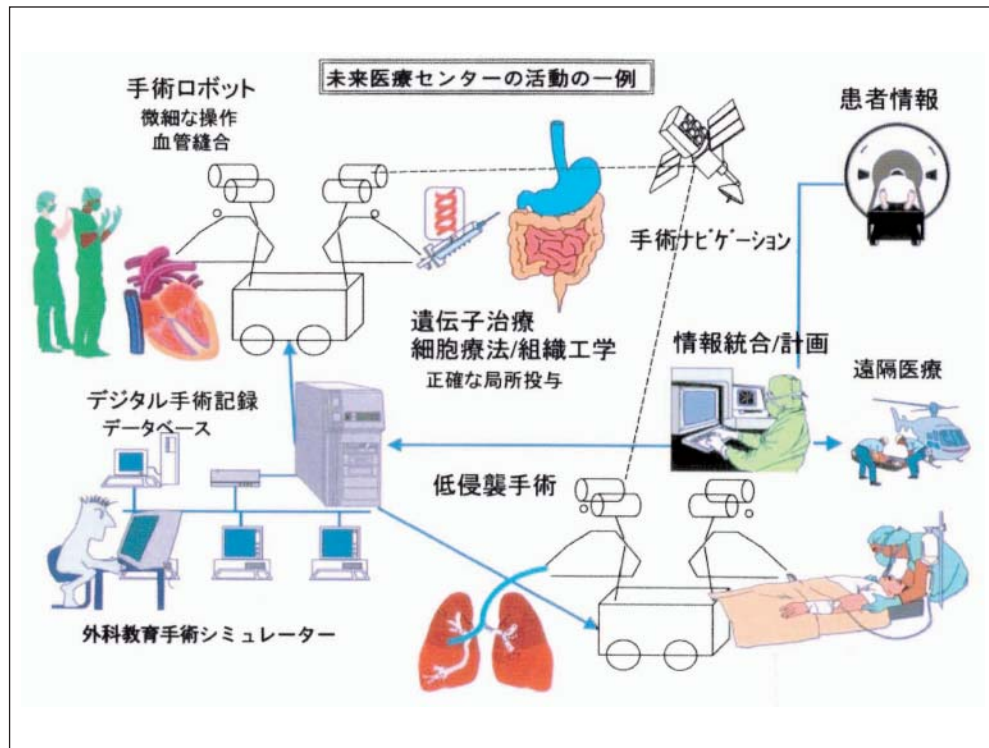


来年度の 当初予算案

「未来医療センター」計上



21世紀における阪大病院の中核となる未来医療センターを設置するための予算が2002年度の政府当初予算案に盛り込まれ、予算が成立すれば、センターが本格的に稼働することになりました。遺伝子治療、再生医療やロボット手術など未来医療開発を行う拠点として、その活動が期待されます。

阪大病院ではすでに慢性閉塞性動脈硬化症の患者さまに対するHGFプラスミドを用いた遺伝子治療や人工股関節置換のロボット手術など未来医療とも言える治療を行っています。しかし、これまではセンターとしての医療ではありませんでした。

今回の予算案によると、専任職員として助

専任に助教教授ら7人 組織細胞工学応用し治療

教授1人、助手1人、技官3人、看護婦(士)2人の計7人体制の組織が認められていま

す。また、昨年度の補正予算でセンター施設

の整備費や検査機器購入費が認められており、外来・中央診療棟

4階の1680㎡をセンターとして整備しています。やっと、センター構想が現実のものとなり始めたのです。

未来医療センターで、これから期待される医療研究の一部を紹介しましょう。

心臓移植で知られる心臓血管外科が取り組

んでいる組織細胞工学を応用した治療は、人工弁、人工血管や人工心臓に代わるものと期待され、実用化が近いとされています。

これまでは心筋の機能が衰えてくれば、薬や補助人工心臓などで治療していましたが、細胞工学と遺伝

子治療をミックスした治療や再生医療を応用すれば、患者さまに負担が少ない治療ができる可能性が出てきています。

また、人工弁や人工血管は血栓ができやすいのが問題になっていますが、人工弁や人工血管の内側に患者さま

自身の細胞を移植することや、ブタの心臓弁に工夫を凝らすことで、血栓ができにくくなるのがわかってきており、開発を進めています。

この他の分野でもセンターが拠点となり、未来医療が開発されていくことでしょう。

生物・化学テロ

阪大病院で「除染」訓練 「特殊災害チーム」中心に80人参加



模擬患者の除染訓練をする医師たち

阪大病院は2001年12月11日に生物・化学テロを想定した防災訓練を行いました。昨年9月の米国での同時多発テロ以来、米国内

だけでなく、炭疽菌による生物テロとみられる事件が相次いでおり、関西で同様の事件が起こった際、災害時の拠点病院として迅速

に対応できるように、訓練を実施しました。

テロ以来、在大阪・神戸米総領事館における白い粉末混入郵便物事件や阪大病院内での白い粉騒ぎ、大阪府内の郵便局員の炭疽菌感染の疑いによる来院などが相次いで起こりました。いずれも炭疽菌ではないことが判明し、大事には至りませ

た。訓練は、除染システムの使い方を習得する目的もありました。

高度救命救急センター医師らで構成される特殊災害医療チーム(SCAT)を中心に、看護婦(士)、技官や事務官ら80人が訓練に参加。室内への汚染を避けるために、高度救命救急センター前のピロティにエアドーム型の除染ボックスとクリーンボックスを組み立てて行われました。



エアドーム型の除染ボックスなどの組み立て

初めてのことがばかりでしたが、除染ボックスの組み立てが意外と簡単なことや、防護服を着用するのは2人で行うほうが早くできるなど貴重な体験をし、災害時の拠点病院としての備えができました。

入院患者さまに服薬指導 病棟業務の充実を図る

薬剤部

阪大病院の薬剤部の業務は、これまで、外来患者さまへの調剤が大きな比重を占めていました。しかし、医薬分業という国の方針に従って、阪大病院でも外来患者さまへの処方箋はすべて院外処方箋とすることになり、薬



薬剤師がベッドサイドに向いてお薬の効能、副作用などを説明。注射薬は患者さまごとに1回分ずつトレーに調剤

剤部の業務は入院患者さまのための業務へと重点を移すことになってきました。これは薬剤部の重要な役割の一つであり、医療の質の向上に寄与すると考えられています。現在、薬剤部が入院患者さまのために取り組んでいる業務の一部を紹介しています。

服薬指導
薬剤師が入院患者さまのベッドサイドに行き、処方された薬について説明することにも副作用が出ています。また、コンピュータに患者さまの薬歴服用された薬の記録を入力し、検査データと照らし合わせて、副作用や薬の飲み合わせで不都合が起らないようにチェックもしています。

服薬指導に力を入れているのは、患者さまになぜ薬を飲む必要があるのか、どのように飲めば効果的で、副作用が出ないかを正しく理解していただくことで、一日も早く健康を取り戻していただくことを考えているからです。黒川信夫薬剤部長は、薬剤師がベッドサイドに来たら、遠慮なく、薬について疑問に思うこと、知りたいことを質問してくださると話しています。

国立大学病院同士で 安全管理をチェック

国立大学病院同士で、お互いの病院を訪問し、安全管理に関する厳しい相互チェックを2000年度から行っています。2001年11月16日には、愛媛大学と香川医科大学の附属病院院長ら12人が阪大病院を訪れました。リスクマネジメントの重点領域になっている手術部での医療事故防止体制、研修医の指導体制をはじめ、各部門における安全管理体制について、丸一日かけて評価が行われました。

航空業界から講師 安全管理対策学

航空機事故を防ぐための安全管理は、医療ミスをなくすための参考になります。2001年11月19日に、全日空総合安全推進部の十亀洋部長を講師にお招きして、リスクマネジメント講習会「航空会社の安全マネジメント」を開きました。安全で質の高い医療を実践するために年4回、阪大病院職員を対象に開いている講習会のうちの1回で、乗客、乗員の命を守るために航空業界で行われている安全を確保するためのさまざまな画期的な手法を紹介していただきました。本院のリスクマネジメントに役立てていきたいと考えています。

子供たちも参加して クリスマスコンサート

21世紀最初のクリスマスコンサートが、2001年12月25日午後6時から阪大病院エントランスホールで開かれ、2組の演奏に子供たちを含めた患者さまが耳を傾けました。ソプラノデュオアンサンブル・フロリーレの二人は「愛のあいさつ」から「きよこの夜」まで歌い上げ、会場ではサンタさんから子供たちにささやかなプレゼントが配られました。リクエストで「アベマリア」を歌い、大きな拍手がわきました。

フローラ・フローラのお二人はお琴で「京都の童唄」から「いつくしみ深き」でエンディング。アンコールにこたえて「お正月」を演奏しました。終演後、松澤病院長から出演者に感謝状が渡されました。



質問箱

Q ネームバンド(リストバンド)とは何ですか?

A 入院された患者さまには、検査、手術、治療などに際して、医師や看護婦(士)をはじめ多くの職員がかかわります。患者さまに初めて対応する職員も少なくありません。また、患者さまがお名前を名乗れない状態の時や病室以外の場所で体調をくずされることもあります。このような場面で患者さまを間違いなく確認するために、主に手首に装着していただく氏名の記載されたバンドをネームバンド=写真=と呼び、わが国の病院で導入されつつあります。阪大病院でも2002年2月中旬から、入院患者さまに装着をお願いすることになりました。ネームバンドを着けるかどうかは患者さまが選択できますが、趣旨をご理解いただき、ご協力をお願いいたします。



見本



糖尿病の患者さまはフットケアが大切

患者さまの病状に合わせたきめ細かな看護で治療をサポートし、生活の質(QOL)を向上させる、専門看護外来が2002年4月からスタートします。この「専門看護外来」には、当面「糖尿病ケア看護外来」と「緩和ケア看護外来」が設置されます。「糖尿病ケア看護外来」は、現在病棟で実施している血糖測定や

インスリン注射の指導をはじめ、足のケアを外来の患者さまにも対象を広げて実施するための外来です。糖尿病はうまく付き合えば健康な人と同じように生涯を全うできます。そのためには自己管理できることが非常に大切で、患者さまご自身が主治医になれるように支援していきます。特に最近注目されている糖尿病患者さまの足病変については、日々のケアが欠かせません。足の血液の循環が悪くなっているのが治りにくく、皮膚の抵抗力が弱くなっている細菌感染を起しやすいこと、壊疽によつて足を失うことにもなりかねません。そのため、足浴をしたり、爪を切ったり、タコや魚の目を削ったり、水虫の処置などをしながら、患者さまの足を守るための予防行動への支援を行います。

「緩和ケア看護外来」は、当初は乳がんの入院患者さまが対象になります。がんや診断を受けて、女性のシンボルともいえる乳房を切除して、放射線治療、抗がん剤を受けなければいけない患者さまも、トだけでなく、精神的なケアが重要です。また、痛みを中心とした症状を緩和するためのケアも必要であり、患者さまやご家族、からだところの両面からの支援を行います。

以上の専門的なケアは、医師のオーダーによる予約制で、より専門的な知識と経験を持つファーストが、医師及び医学部保健学科教官と協同で行います。看護部では様々な領域の専門ナースの育成にも力を入れており、将来的には、より多くの病気の患者さまに対応し、さらに地域とも連携していく構想を持っています。

4月から

専門看護外来が発足

糖尿病と乳がんの患者さまから

注射薬オーダリングシステムと自動抽出装置
2000年7月から稼働し始め、注射薬の調剤が迅速、正確かつ安全にできるようになり、病棟では看護婦(士)の注射薬業務が軽減され、看護により集中できるようになりました。これまでのシステムでは、薬剤部から渡された注射薬がまとめて病棟で管理され、医師の処方に従って看護婦(士)が患者さまごとに取りそろえていました。そのため、看護婦(士)が注射薬の準備に時間を割かれたり、注射薬の組み合わせによる薬液変化などを完璧にチェックしたりすることが難しいこともあり、オーダリングシステムは医師が入院患者さまごとにコンピュータで、本来の看護に十分な時間を割けるようになり、また、「注射薬自動抽出装置」もコンピュータによつてコントロールされています。注射薬の組み合わせによつて発生する薬液変化や相互作用(副作用など)を事前にチェックでき、注射薬による事故を未然に防ぐことができます。

医師会便り

豊中市医師会長 大井 義博

豊中市医師会は、1998年から3年間、大阪府の委託事業として、かかりつけ医推進事業に取り組み、地域住民の健康管理、通院および在宅医療の情報提供の基盤作りを行って参りました。そして現在は、大阪府の補助事業である、在宅医療協力医・ターミナルケア推進事業として引き続き、地域医療、病診連携の充実を図るところです。

在宅医療を推進

数多くの医療関係機関や市民からの問い合わせに対応して、全科にわたり、患者さまの病状や居場所に合わせ、地域の適切な医師を数人紹介してその中から選択していただく、必要に応じて往診できる医師を紹介するシステムも医師会内に設けて好評を得ています。

大学病院での治療後のアフターケアに、また病診連携の実践の場として大学病院の関係者の方々に活用いただければ幸いです。

豊中市医師会、在宅医療協力医・ターミナルケア推進事業部(06-6842-5181)にご連絡ください。(1962年阪大医学部卒)